

出エジプト記7章6節 「命じられたのに、なぜ？」

1A 「わたしが主」

1B 自分の知恵

2B 自分の力

3B 主のご計画

2A 心を頑なにする神

1B 「うまく行く」のではない方

2B 「うまく行かない」の用いられる方

3B 「わたしが主」の現れ

3A 命じられたことのみ

1B 付け足さない従順

2B 主の言わされたとおり

本文

出エジプト記 7 章を開いてください。聖書通読の学びが、前回、出エジプト記 4 章まで来ました。午後の礼拝では、5 章、6 章、そして 7 章の 7 節まで読んでいきます。今朝は、その最後の部分、7 章 6 節をまず読んでみたいと思います。「**そこでモーセとアロンはそのように行った。主が彼らに命じられたとおりに行った。**」

前回の学びのことを思い出してください。モーセは、主からエジプトに行き、ファラオに主の命じられていることを語り、イスラエルの子らをそこから救い出しなさいと、命じられていました。この召し、呼びかけに対して、モーセは自分は何者なのか？ということで、非常にためらいました。しかし、最後は何とか従い、兄アロンと共にエジプトに戻りました。

そして 5 章、6 章を午後礼拝で一節ずつ読んでいきますが、結果は燐燐たるものです。主の言わされたことを伝えました。ところが、全くファラオの心には響きません。それどころか、「彼らが、いにえを獻げるためにエジプトを出て行かせろ、なんて、なまけたいからそんなことを言っているのだ」として、イスラエルの子らをさらに労役で苦しめたのです。

それで、民がモーセのところに行って、非難しました。「あなたたちが、ファラオのところに行って余計なことを話したから、こんなひどい目に遭っているのだ」と訴えたのです。これは、教会において、神の民の間で、よくあることです。主のみこころを行うために、一歩、前に出ました。そうすると、いろいろ大変なことが起こります。すると、「こんな悪いことが起ったじゃないですか！」と、非難合戦や原因探しをします。午後礼拝でじっくり学びますが、主のみこころを行うというのは、そのま

ま、敵陣に攻め入っていることなのです。敵からの反撃があるのは、当然のことです。

しかし、モーセはうろたえます。彼自身が、主ご自身に、非難が混ざった訴えをします。「5:22-23 主よ、なぜ、あなたはこの民をひどい目にあわせられるのですか。いったい、なぜあなたは私を遣わされたのですか。²³ 私がファラオのところに行って、あなたの御名によって語って以来、彼はこの民を虐げています。それなのに、あなたは、あなたの民を一向に救い出そうとはなさいません。」

3章と4章では、主の召しに対して、モーセがいかにためらったかを見ました。最後に、モーセは何とか聞き従って、アロンと共にエジプトに戻りました。しかし、5章と6章では、モーセが、覚悟を決めて従ったかどうか？が問われています。主の召しに応じたものの、心がまだ定まっていません。主の言われたとおりして、起こったことについて右往左往しているのでは、まだ、主のわざが、そのまま現れません。

覚えていますか、イエスが、ご自身について来ている群衆に対して、「費用を計算しなさい」と言わされましたね。「ルカ 14:28-30 あなたがたのうちに、塔を建てようとするとき、まず座って、完成させるのに十分な金があるかどうか、費用を計算しない人がいるでしょうか。計算しないと、土台を据えただけで完成できず、見ていた人たちはみなその人を嘲って、30『この人は建て始めたのに、完成できなかった』と言うでしょう。」主に従えば、こんなことが起こり得る。そういった、犠牲がある。けれども、それでも私は従います、という費用計算です。覚悟です。そして、7章7節が、モーセとアロンが、その覚悟を決めた、初めの一歩になります。「**そこでモーセとアロンはそのように行った。主が彼らに命じられたとおりに行った。** 」です。

1A 「わたしは主」

イスラエルの人々に責められて、モーセ自身が主に訴えたところに戻ります。5章最後で、そのことを言っていますが、その後で主は、モーセの訴えた事柄に、答えられませんでした。主が、モーセに、「いや、こうすれば良かったんだよ。もっと力強くファラオの前に語れば、彼は言うことを聞いたかもしれない。民に対しては、もっと優しくふるまいなさい」とか、言われなかったのです。

主が語られたのは、「わたしは主である」だけです。6章2節を見てください、「神はモーセに語り、彼に仰せられた。「わたしは主である。」」そして、「わたしは」と言われて、わたしが、これこれをすると、贅いのわざを語られます。8節の最後、「わたしは主である」でしめくくっておられるのです。「わたしは、「わたしはある」という者だと」と、モーセの意見の調整など全くせず、「わたしはしていることは、わたしはしているのだ」として、ご自身のご計画をモーセに開示しておられます。

1B 自分の知恵

モーセは、主に従つたものの、まだ、自分自身でいろいろ考えて、自分自身で何かやろうとして

いるから、右往左往しているのです。

自分が、これこれをやつたら、こうなったけれども、これはおかしくないですか？とモーセは、主に対して言っているわけですが、それは言い換えると、「わたしのほうが、あなたよりも分かっています」と言っているようなものです。自分の理解で、主のなされていることを推しはかろうとしているのです。けれども聖書は、何と言っていますか？「ロマ 11:34-35 だれが主の心を知っているのですか。だれが主の助言者になったのですか。35 だれがまず主に与え、主から報いを受けるのですか。」天が地よりも高いように、主の思いは、私たちの思いよりも高いのです！

2B 自分の力

そしてモーセが、主に非難めいた訴えをしているもう一つの理由は、どこかで自分の力で、自分の責任で成果を出さないといけないと思っていることです。自分が語ったのに、かえってファラオは、イスラエルの民を虐げていると言っていますが、その結果について、がっかり来ています。この気持ち、ものすごく分かります。自分が心血を注いで伝道したのに、全く反応がないどころか、反発だけがいっぱいになり、かえって人々が、福音に対して強硬になった、なんていうことは、よくある話です。その時に、確かにがっかりします。

しかし、主は、結果を出せなど言われていないのです。実を結ぶと主は言われますが、実は主が成長させて結ばせるのです。コリントの教会の人たちにパウロが言いました。「Iコリ 3:7 ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」自分が、その結果を出すように命じられていないのに、それを勝手に思っているというのが実情です。不必要的責任感です。それで、自分は負いきれないです！と非難しても、おかしな話で、そもそも、主は、成果を出せと命じておられません。

3B 主のご計画

すべては、神のご計画が実行されていくだけです。神から始まり、神によって成り、神に至ります。「箴 19:21 人の心には多くの思いがある。しかし、【主】の計画こそが実現する。」「イザ 46:10 わたしは後のことから始めながら告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。」

私たちは、主のなされていることに、さらに付け加えて何かしたいとどうしても思ってしまいます。すべて、主がなさっていることであり、主の栄光なのです。特に、贖いのわざ、救いのわざは、もっぱら主ご自身が、ご自分で成し遂げるものです。

イエスが、高い山に上り、三人の弟子も上った時のことを思い出してください。そこで主の御姿が変わり、輝きました。モーセとエリヤが出てきました。そして、ペテロが何を言えばよいか分から

ず、こう言ったのです。「マタ 17:4 そこでペテロがイエスに言った。「主よ、私たちがここにいることはすばらしいことです。よろしければ、私がここに幕屋を三つ造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」」滑稽ですが、幕屋を造ってあげなくていいのです。本人たちは、主イエスがこれからエルサレムに行き、十字架に付けられることを話していました。

2A 心を頑なにする神

そして、主のなされていることで、モーセがどうしても完全に受け入れていなかつたことがあります。それが、「主が、ファラオの心を頑なにするんですか？」ということです。今朝の本文、7章6節では、ついに、すべてを受け入れ、心を定めたのですが、それまでは、ファラオの頑なさを見て、うろたえていました。二人が心を決める、主の最後の言葉がこれです。「7:3 わたしはファラオの心を頑なにし、わたしのしるしと不思議をエジプトの地で数多く行う。」主が、心を開かれるだけでなく、閉じることもなされるのです。これは、本人が心を広くしようと思っているのに、主が無理やり閉ざすということではなく、人々、強情であったのが、そのままにして置き、その頑なさを用いて、ご自分のわざを、妨げられることなくご自由に行われるということです。

1B 「うまく行く」のではない方

私たち教会に直接関わるのは、使徒の働きであります。モーセが通ったところと、全く同じところを通っています。使徒たちのしていることが、糸余曲折していることを、よく分かっておられると思います。エルサレムで主の教えがいっぱいになって、けれども、ステパノが石打にあって、殉教しました。そして、人々が逃げて行ったのですが、それこそが、主がご計画されていた、「地の果てまで、わたしの証人になる」ということです。パウロたちも、迫害から迫害へ、いのちが危うくなるから、別の町へ動いていき、それで教会が各地に建てられて行きました。

2B 「うまく行かない」のを用いられる方

うまく行ってないんですね、一言でいうと。ところが、私たちは、うまく行っていないと、そこには主がおられないと思い、うまく行っている、順風だと主がおられるはどうしても思ってしまいます。しかし、主は、人々が福音に反発したり、迫害することさえも、ご自分の計画の中にすでに組み込まれていて、それで事を進ませます。

ですから、モーセは、ファラオの心を頑なにするという主のみこころを、しっかりと心の中に受け入れたのです。これには、かなりの覚悟が必要です。パウロが、こう言っています。「ロマ 9:17-18 聖書はファラオにこう言っています。「このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため、そして、わたしの名を全地に知らしめるためである。」18 ですから、神は人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままに頑なにされるのです。」主は頑なさえ、お用いになるのです。

3B 「わたしが主」の現れ

モーセに対して、どうしてファラオを頑なにするのかを、続けて語っておられます。7章5節です、「わたしが手をエジプトの上に伸ばし、イスラエルの子らを彼らのただ中から導き出すとき、エジプトは、わたしが主であることを知る。」ファラオが強情になれば、それだけ、エジプトで、不思議とするしを神が行われます。それで、エジプトが、ご自分が主であることを知るようになると言われますモーセとアロンが、初めにファラオのところに行つた時に、5章2節「主とは何者だ。私がその声を聞いて、イスラエルを去らせなければならぬとは。私は主を知らない」と言ったのです。けれども、今は、主が何者であるか、分かるようになる、ということです。

このように、ファラオの心を頑なにするのは、ご自身が、イスラエルの民の間だけでなく、頑なにしているファラオの国に対しても、主であることを示すためでした。こうやって、主ご自身が、伝道しているのです。証しておられるのです。

3A 命じられたことのみ

1B 付け足さない従順

こうやって、主がすべて、エジプトからイスラエルの民を贖うご計画を立てておられるのです。そして、モーセとアロンは、ただ主の言わされたことを、行うだけです。それが、「**そこでモーセとアロンはそのように行った。主が彼らに命じられたとおりに行った**」の意味です。その命令に付け足すこともなく、ああだ、こうだ文句を言うのではなく、言われたことを、そのまんま行ったのです。

2B 主の言わされたとおり

7章6節から、すべてが変わりました。主がご自分の言わされたことを、ことごとく行われるのであります。7章10節を見てください、「モーセとアロンはファラオのところに行き、主が命じられたとおりに行った。」杖を投げたら、蛇になりました。そして13節、「それでもファラオの心は頑なになり、彼らの言うことを聞き入れなかつた。主が言わされたとおりであった。」主が言わされたとおりになります。

そして、初めの災い、ナイル川が地になる時も、20節、「モーセとアロンは主が命じられたとおりに行った。」とありますが、22節、「それで、ファラオの心は頑なになり、彼らの言うことを聞き入れなかつた。主が言わされたとおりであった。」この言葉が、何度も、何度も続きます。彼らは、ファラオが頑なになるのを見て、自分が言い方が間違っていたとか、そういったことをいちいち、思いませんでした。主が、ファラオを御手の中に入れていて、彼が強情になるのにも、その中で起こつてることですから、もう知ったことか！なのです。

彼らが行ったのは、ただ、杖を上にあげることとかです。また、声に出すことぐらいです。自分たちは、ただ主の器であるにしか過ぎず、主が、事を行われているだけです。そして最後、ファラオに對峙したのは、紅海の時、杖を上にあげたら、水が分かれました。そして、手を海に向けて伸ばせ

と、主が言われますから、その通りにした、水が元通りになりました。それで、エジプト人たちは海の只中で、溺れ死ぬのです。

これこそが、御靈の働きです。自分自身は、主の言われることにそのまま聞き従い、その通りにすることで、御靈が、主の証しを立ててくださいます。